



審査員特別賞

佐木隆三賞

## 46 ページの手紙

山口 楽々

私が住んでいる地域で、映画の撮影があった。小学四年生の夏だった。有名な女優さんが来ると聞き、大はしやぎした。地域の人がエキストラとして参加できると知って、迷わず応募した。多くの人々が応募したので、抽選となった。その結果を待っている間、街の様子はみるみる変わっていった。映画館のセットが生まれ、昭和五十年代の設定の映画だったため、電柱の文字も昔の字体に変わった。何日も何日もかけて少しずつ昔の街へタイムスリップしていった。その後、エキストラの当選通知が来た。本当に嬉しかった。

待ちに待った映画の撮影の日がやってきた。エキストラの人と野次馬の人で、駅前一带が別世界になった。昔の衣装に着がえ、他の小学生のエキストラの人たちと待機していたら、見知らぬおじさんに、

「おはよう。今日はよろしくね。」

と声をかけられた。アロハシャツ姿でにこやかで、怪しげに見えた。

そして、映画の撮影が始まった。道路は封鎖され、その日を臨時休業にした店もあった。始まってすぐは出番がなかった。日陰で待っていた。ジリジリと暑かった。

やっと出番が回ってきた。主人公の後ろを歩くというもので、単純なことのように思えた。しかし、実際は違った。画面の中では、豆粒のようにしか見えない人でも、一つ一つ入念に細かく動きをチェックしていた。電車が絡む撮影だったので、十五分に一回ぐらいいしかできなかったが、何回も何回もリハーサルを重ねた。その中で、何人もの人に指示を出している人がいた。アロハシャツだった。アロハシャツ？どこかで見たことあるぞ！と思ったら、朝、声をかけ

てくれた人だった。その人は監督だった。

その夜遅く、撮影は終わった。翌朝には、街に作られたセツトは壊されていた。元の街に戻っていくのは、嬉しくもあり、寂しくもあった。タイムスリップから戻ってきた街は、何となく違って見えた。

この一連の様子をまとめて自由研究として出品した。なんと、その作品が特選を獲ることができたのだ。あまりにも嬉しかったので、その映画の監督に手紙を送った。自由研究を縮小コピーしてノートに貼って、報告や質問など長い手紙を書いた。ちゃんと届くか心配だったが、いつの間にか、忘れてしまった。

一ヶ月経ったクリスマス・イヴに、ピンポンとインターホンが鳴った。その段ボール箱は何？と思ったら、それは監督からの返事の荷物だった。たくさん映画のグッズの中に、一冊のノートがあった。それは、手紙で、監督の出身地の話や、中二で映画に魅せられた話や、苦しい助監督時代の話や、演出の意図や方法などが、イラスト付きで書かれていて、私はすごく感激した。

それに加えて、映画の試写会の時に、手紙のことを知ったスタッフの方が監督に対面するチャンスを与えてくださった。とても緊張した。対面の場で、監督に

「将来の夢は？」

と聞かれた。私は迷わず、

「ゲームクリエイターになることです。」

と答えた。当時ゲームが大好きだった私は、ゲーム関連の本をたくさん読んでいた。すると、監督から、

「よく知ってるね。」

と誉められた。監督のお手紙の中に、

「楽々ちゃんも、何かやりたい事やスポーツ、なってみて職業を見つけたら、その楽しさを知る事が一番だと思えます。楽しさを知っていれば、苦しい時やあきらめそうになった時に、きっと人よりガンバレると思います。」と書いてあった。当時はあまり意味がわからなかった。

中学三年生になった今、将来の夢も変わり、テレビ番組のディレクターになりたいと思うようになった。それは、映画の撮影の裏側を間近で見ることができたからかもしれ

ない。もともとテレビが大好きだった私は、テレビの裏側にも興味を持つようになった。監督の言葉の意味もわかったような気がする。

私の名前には、「楽」という字が入っている。何事も楽しく楽しんでやれるといいねと母が付けてくれた。それは、偶然にも監督の言葉と同じに思える。

私は、これからも、名前の由来と監督の言葉を胸に、夢をかなえていきたいと思う。

あれから五年、あの後も、三作品で、監督は、北九州でロケをなさった。その度に、撮影現場に、お邪魔して、監督とお会いた。緻密な準備をして緊迫した雰囲気撮影されたものが、どんな作品なのか、完成がいつも楽しみだ。私も、いつか、人に楽しさをおぼわってもらえるようになるといいなと思う。

監督からいただいた、四十六ページの手紙は、私の宝物だ。大人になっても、時々、読み直そうと思う。